

平成 28 年 10 月 19 日

V I A X 児童部会

平成 28 年度 第 3 回「基本図書から学ぶ」報告書

1. 日 時 平成 28 年 9 月 16 日（金） 14：00～16：20

2. 場 所 ヴィアックス研修センター（鳩山ビル 6 階）

3. 参加者 15 名

4. 配布資料 ①『やかまし村の子どもたち』事前課題紹介文まとめ
②『いやいやえん』事前課題紹介文まとめ
③グループワーク用紹介文用紙

5. 内容

- (1) 子どもと同じように耳で物語を聞く体験として、事務局より『やかまし村の子どもたち』と『いやいやえん』の冒頭の一章の読み聞かせがあった。
- (2) 4つの班に分かれ、『やかまし村の子どもたち』（アストリッド・リンドグレーン 作 イロン・ヴィークランドさし絵 大塚勇三訳 岩波書店 1965）と『いやいやえん』（中川李枝子作 大村百合子絵 福音館書店 1962）のそれぞれの作品で描かれている子ども像と今の子どもたちがどのように読むのかについて話し合い、発表を行った。以下、各グループの発表内容である。

『やかまし村の子どもたち』

<描かれている子ども像>

- ・ 遊びの達人（自分たちで遊びを作り出す）
- ・ 遊びが生活の中心
- ・ 冒険が大好き
- ・ 自然の中で遊んでいる
- ・ 6人しかいなくても男女の差がある（対立や協力が見られる）
- ・ 異なる年齢の子と遊んでいる
- ・ 子どもたちだけで行動していて、大人の干渉が少ない
- ・ お手伝いのアグダや隣のおじいさんが気にかけてくれるなど、家族以外ともかかわりがある

<今の子どもたちがどのように読むか>

- ・ 自然の中での遊びや冒険が生活の中心ということへの憧れ
- ・ 自分たちだけで遊べることへの憧れ
- ・ 今の子どもたちもしている遊びもあり、共感できる
- ・ 自分たちもやってみたくなる

『いやいやえん』

<描かれている子ども像>

- ・ 主人公のしげるはどこにでもいそうな子どもである
- ・ 自分より小さい子にはやさしい姿をみせている
- ・ 園で生活している子の日常（ごっこ遊びなど）の姿が描かれている
- ・ 親や大人からの干渉がある（叱る大人の存在がある）

<今の子どもたちがどのように読むか>

- ・ しげるのできないことは、どの子にもあてはまりそうなことなので、共感できる
- ・ 園で生活している子にとっては同じようなことが起こりそうでわくわくする
- ・ ごっこあそびなど自分たちもしていることに共感できる
- ・ 環境が変わり、押入れに入れられる怖さなどはわからないのではないか

(3) 事務局より、両作品を通してのまとめがあった。

- ・ 子どもが遊びの天才であることは今も昔も変わらないが、遊ぶものや子どもを取り巻く環境が変わってきている
- ・ 『やかまし村の子どもたち』は大人からの干渉が少なく、『いやいやえん』では大人からの干渉があるが、どちらも大人の愛情が伝わる
- ・ 『いやいやえん』は、大人が読むと使われなくなった言葉などがあり古く感じるときもあるが、子どもはあまり気にせずその世界に入り込んでいるようである
- ・ 戦前、日本の児童文学では、子どもは大人から見た「良い子ども」としての描かれ方だったが、1960年代以降、ありのままの子ども像が描かれるようになった。『いやいやえん』はその代表作でもある。

(4) A・B班は『やかまし村の子どもたち』について、C・D班は『いやいやえん』について、各自が作成した紹介文の良い点を確認し、発表した。紹介文の良い点として、主に次のものがあげられた。

- ・ 基本的な内容がおさえられている
- ・ 描かれている魅力的な場面について具体的に紹介されている
- ・ 作者についてや他の著作にも触れている

- ・ 長く読み継がれている作品であることを伝えている
- ・ 「北欧のスタイル」という言葉や「絵本から一人読みへ移行する時期に最適」など保護者の関心を引き、子どもにすすめてみようと思ってもらえるような文章がある
- ・ 文章や内容だけではなく、挿絵についても触れている

(5) (4) の活動を受けて、各班で紹介文を作成した。完成しなかった班は後日事務局へ送付した。以下、各班が作成した紹介文である。

A班『やかまし村の子どもたち』紹介文

スウェーデンの田舎にある「やかまし村」には家がたったの三軒だけ。子どもは6人しかいません。大自然に囲まれた小さな村で暮らす主人公リーサが学校のことや村での生活を楽しく生き生きと語りかけます。

友達が少なく寂しいのかと思いきや、そんな心配は全くご無用！「やかまし村」はその名のとおりいつもにぎやか。子どもたちが周囲の大人たちに優しく見守られながら元気いっぱい遊びまわる、のどかで明るい村なんです。外での冒険と家の中での心地よい暮らしに、憧れや共感を抱けるでしょう。誕生日、クリスマスなど日本でも馴染みのイベントが北欧スタイルで描かれているところも魅力です。読んでみると、自分も「やかまし村」の住人になって一緒に遊びまわっている気分になれるですよ。

続編に『やかまし村の春・夏・秋・冬』と『やかまし村はいつもにぎやか』があります。

B班『やかまし村の子どもたち』紹介文

7歳の女の子リーサはやかまし村に住んでいます。やかまし村は並んで立っている3軒の家だけの小さな村です。村での生活は野イチゴを摘んだり、夜に干し草で眠ったりと読んでいる子どもたちが体験してみたいと思ったことであふれています。また、村の大人たちもおおらかに子どもたちを見守っています。

そんな生活がリーサの語りでいきいきと描かれています。挿し絵もスウェーデンの農村での生活や雰囲気が伝わる素朴なものです。17編の短い話で構成されており、続編も出版されています。自分で読むなら小学校中学年から高学年向けですが、低学年への読み聞かせにも向いています。

作者であるリンドグレーンの作品は、世界の70か国語以上に翻訳され、100以上の国で出版されており、世界中で多くの人に愛され、読み継がれています。

C班『いやいやえん』紹介文

ちゅーりっぷほういくえんに通う 4 歳のしげるはいつも保育園の先生やお母さんを困らせてばかりいます。

何でも「いや」というしげるは、好きなことをしていい「いやいやえん」に連れて行かれます。楽しい場所かと思ったら実際は……。

他にも、保育園に来たこぐまの話、しげるを食べようとしたものの汚なすぎて急いでお湯を沸かすおおかみの話など、短めのお話から少し長めのお話まで、全部で 7 話収録されています。

保育士だった作者によって描かれるありのままの子どもの姿は、現代の子どもたちも共感するところが多いでしょう。保育園という日常の中からふと空想の世界が広がる物語の世界観も幼い子どもを惹きつけます。

作者は『ぐりとぐら』でお馴染みの中川李枝子と大村百合子。これが二人のデビュー作であり、50 年以上も愛され続けるロングセラーとなっています。

D班『いやいやえん』紹介文

主人公のしげるは、ちゅーりっぷほういくえんのばら組の 4 歳です。簡単な約束も守れないような、ちょっとわんぱくな男の子です。このお話は、ちゅーりっぷほういくえんの子どもたちと先生の日常から、ファンタジーの世界へと広がっていく様子が楽しく描かれています。約束を忘れてすぐ悪いことをしてしまうしげるのお話や、男の子たちが積み木で作った船“ぞうとらいおんまる”で海にこぎ出し、くじらをとるお話など、全部で 7 つのお話が入っています。

保育士だった著者によって、子どもの気持ちに寄りそって書かれているので、子どもたちは共感しながら読み進めることが出来ます。また、全ページに挿絵が入っているので、一人読みを始めたばかりの子にもおすすめです。

「ぐりとぐら」の著者である中川李枝子と大村百合子のデビュー作で、今も読み継がれているロングセラー童話です。

6. 所感

- ・ ありのままの子ども像が描かれることによって、今の子どもたちも素直に共感し物語を楽しむということを再確認できた
- ・ 同じ作品についての紹介文でも、それぞれ選ぶ言葉や紹介する切り口が異なり、とても興味深く思った
- ・ 作品を評価し紹介文を書くことで、作品に対する再確認となった。どのように紹介したら作品を手にとってもらえるか、今後も学んでいきたい